

## 書評 村山祐司・柴崎亮介編：『シリーズGIS 4 ビジネス・行政のためのGIS』

著者	森本 健弘
雑誌名	地理空間
巻	1
号	1
ページ	76-77
発行年	2008
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00151339">http://hdl.handle.net/2241/00151339</a>

イギリス(杉浦直), ドイツ(加賀美雅弘), フランス(手塚章), スペイン(石井久生), オランダ(大島規江), 中国(杜国慶), シンガポール(山下清海), タイ・ラオス(横山智), オーストラリア(吉田道代)について, 各エスニック社会の特色が論じられている。本章は第I章に比べて各国の紙面が多く割いてあり, 各地でみられるエスニック社会の成立の歴史的経緯, 変質・変容過程, そして近年の変化が詳細に述べられている。

第III章「日本のエスニック社会」は, 日本国内にみられるエスニック社会を事例としたものである。アイヌ社会(千葉立也), コリアン社会(福本拓・千葉立也), 華人社会(山下清海), ブラジル人社会(片岡博美), インド人社会(澤宗則)が取りあげられ, 日本における各エスニック集団がどのような契機で出現し, その後どのように変質してきたかについての詳細な考察が展開されている。今日では, 日本国内においてもエスニック社会はもはや珍しい存在ではなくなった。いわゆるニューチャイナタウン(池袋)の出現や, 在日コリアン社会の変質, 定住化の進むブラジル人社会や, 世界都市・東京で増加するインド人IT技術者, 留学生の増加などの事例を知るにつれ, 多くの国々でみられる種々の社会問題は, もはや他国のものではないことに気づく。

本書を通読して気づいた点を挙げるならば, 移民のオリジンと歴史的経緯, そして移動時期などの事項について, 個々別々に述べられている印象は拭えない。個々の充実した記述に加え, 移民のダイナミズムを世界的に関連づけて示す方法もありえたのではないだろうか。例えば, WASPを中心とした移民社会から東欧・南欧系, そしてアジア系移民が増加するプロセスは, アメリカ合衆国のみならずカナダやオーストラリアでも共通してみられるトレンドである。また, 19世紀半ばのゴールドラッシュや各種開拓事業のための移動, 日本人の北米や中南米への移動, 20世紀初頭のイタリア人のブラジルへの移動, 第二次大戦後～1960年代までに世界的にみられた移動も大きなダイナミズムを感じる。世界的な移民の流れについての世界地図(流線図)を掲載した Segal, A. : An

Atlas of International Migration. Hans Zell Pub, 1993, 233p. のように, 移民発生のメカニズムを個別に述べるだけでなく, グローバルな視点から概説する章があってもよかつたかもしれない。

ないものねだりをしたが, これは本書の価値を損なうものではない。個々の国の記述については, それぞれは少ない紙面ながらも非常に充実した内容となっている点に感服させられる。編者も冒頭に述べているように, 一昔前に比べると, 国内外を問わず, エスニック社会についての調査はやりやすくなってきている。また, 統計が整備されている国については, 極端な話では, 現地に行かなくても GIS で地図を作成する程度の作業は可能となった。一方で, 統計には表れない, 真の姿を見抜く力も調査には不可欠である。本書は, 現地をよく知る研究者による鋭い切り口が随所に現れている。例えば, 外国に居住するインド人の増加とグローバリゼーションとの関連について言及する一方で, そうした一握りの「成功者」の陰で, 現実には多くの国民が貧困にあえいでいる現実も紹介されている。また, ドイツ統合と都市再開発の波にさらされるベルリンのトルコ人の事例では, トルコ人としてのアイデンティティを保持・継承するために集住し続ける様子が端的に描き出されている。移民社会というエスニック集団がもつ本質を鋭く見抜く視点は, 実際に現地に滞在した地理学者ならではの丹念なフィールドワークの賜物である。本書は, 外国のエスニック社会を理解する上で有益であることは言うまでもないが, 着実に増加しつつある日本国内のエスニック社会を理解する上でも, 多くの示唆を与えてくれる。本書は真の国際理解や異文化理解にとって不可欠な一冊である。

(堤 純)

村山祐司・柴崎亮介編：『シリーズ GIS 4 ビジネス・行政のための GIS』朝倉書店, 2008年3月, 196p., 3,800円(税別)。

全5巻で刊行されつつある『シリーズ GIS』は, うち3巻までが GIS の実践・応用の紹介にあて

られることがその大きな特徴である。編者はそのねらいを巻頭言「シリーズ GIS 刊行に寄せて」のなかで、「GIS の理論・技術と実践・応用を体系的に論じることにより、実務家、研究者、GIS を志す学生や社会人にむけた使えるテキストを目指したい」と述べている。そもそも GIS は始まりから実務での活用がなされ、近年その進展は著しい。しかし社会における GIS 実務を幅広くかつ体系的・専門的に紹介する叢書は、わが国では初めてではなからうか。時宜を得た出版といえる。

シリーズ第 4 巻である本書の中心的内容は、さまざまなビジネス分野と行政における GIS の活用例を具体的に紹介し、それぞれの世界における GIS の役割、意義、課題、そして将来像を論じることである。以下では簡単に構成を紹介する。

冒頭の第 1 章ではビジネス・行政における GIS の利用が概論される。第 2 章からは各論となり、物流システム、農業、林業、漁業、施設・ライフライン管理、エリアマーケティング、位置情報サービス、不動産業、都市・地域計画、福祉事業、および公共政策という分野がそれぞれ一つの章として取り扱われる。各分野の実務において GIS がどのように使われ、どのような成果を挙げ、今後どのような課題が解決されるべきで、将来はどのような活用が想定されるか、詳細に論じられる。各章は知識豊富な実務家ないし研究者によって執筆され、事例が十分に紹介される。

さらに、GIS の実務利用の基盤情報としてますます重要になりつつある小地域統計の概説と分析事例、および GIS の導入・利用コストに対する効果や便益の分析が、それぞれ一つの章をたてて論じられる。

本書では実務のロジックのなかで GIS がどう活用されているか、実務の要求からみると GIS はどのように発展していくべきなのかを、幅広い分野にわたり新しい事例によって知ることができる。読者は、漁業や林業といったふだんあまり目立たない分野については、GIS 利用がここまで進捗しているということに驚きとともに知ることができるだろう。一方、エリアマーケティングや位置情報サービス等、GIS の活用を見聞きする

ことの比較的多い分野についても新たな、かつ体系的な知見が得られるに違いない。さらに、実務に GIS を使う上で死活的に重要となる「GIS はその導入コストに対してどんな見返りを与えてくれるか」という視点を学ぶことができる。

本書には以上のようにこれまでの GIS 教科書にはなかった独自性がある。GIS の知識を就職して活かしたいと考えている学生、GIS を仕事に利用したい社会人、ビジネス・行政分野に関心をもつ研究者や院生、そして GIS を教える教員に、シリーズ続刊を含めて、一読をすすめたい。

(森本健弘)

**横山 智・落合雪野編：『ラオス農山村地域研究』**  
めこん、2008 年 3 月刊、453p., 3,500 円(税別)。

本書は専門を異にする 15 名の研究者の協働により編まれた学際的なラオス地域研究の成果である。編者自身が本書をして「外国語で書かれた書籍を含めても、ラオス農山村をここまで多面的に、かつ広範囲に論じた類書はない」と断言するように (3 頁)、ラオスに関心を持つ者にとって、本書はまさに待望の一冊と言っても良いだろう。

本書のような研究成果が希求されてきた背景として、ラオス農山村地域をめぐる特殊な事情が指摘できる。まず、ごく近年まで本地域での外国人研究者による研究活動は極めて困難であった。これは本地域における第 2 次世界大戦後の 20 余年にも及ぶ内乱と、その後続く社会主義政府による国内移動の統制、特に農山村地域への移動制限によるところが大きい。外国人研究者に農山村地域での研究活動を認可されるようになるのは、2000 年前後まで待たねばならなかった。次に、研究が遅々として進まない状況にあって、本地域は大きく変化を遂げつつあった。特に 1986 年に始まる「チンタナカーン・マイ」に基づく経済自由化と対外開放政策は、交通・通信インフラ整備、商品作物栽培の普及、NGO による農村開発プロジェクト、中央政府による土地利用の近代化など様々な変化を本地域にもたらしていた。

つまり、現在のラオス農山村地域はその来歴す